

屋久島（鹿児島県）は、面積504 km²の円形の島で、種子島の西側に位置しています。17世紀半ばから継続的な林野利用が始まり、大正期から1970年頃にかけては、国有林内に森林軌道や林業集落が建設される形で木材生産が盛んに行われました。人々と森林との様々な関わりが評価され、2016年度に林業遺産として選定されました。

1993年に世界自然遺産に登録された屋久島の山域（107 km²）には、縄文杉に代表される注¹樹齢700〜800年を超える杉の巨木「屋久杉」が生育し、現在も島の「自然」を見ようと多くの観光客が訪れます。しかし「自然」の島として注目されるようになったのは、ここ数十年に過ぎません。むしろ屋久島は、数百年も前から林業地として君臨してきました。

17世紀中頃から、薩摩藩は年貢の代わりに杉材を納めることを島民に求めました。藩による林産物の専売制度の開始です。島民は、山中で寝泊まりしながら、斧で杉の巨木を伐採し、現場で平木と呼ばれる屋根ふき材に加工し、里まで運びました。現在でも、江戸時代に伐採されたスギの伐根（土埋木）が林内に残り、観光や工芸品の資源となっています。また当時の伐採跡地に生育した高齢級杉（コスギ）は、現在は美林に成長しています。

明治期になり、入会利用を行ってきた森林を含む大半の土地が官有地に編入さ



森林軌道が完成した直後に撮影された写真（1925年頃）
屋久島森林生態系保全センター蔵



日本森林学会による

日本の林業遺産を知ろう！

第6回 屋久島の林業集落跡及び森林軌道跡

一般社団法人日本森林学会林業遺産選定委員 国立歴史民俗博物館 柴崎 茂光



江戸時代に伐採されたスギの伐根 土埋木(2012年)
国立歴史民俗博物館撮影



現在も林内に残る炭窯跡 (2011年) 筆者撮影



小杉谷小・中学校 (1965年頃) 屋久島森林生態系保全センター蔵



トロノリによる運材風景 (1957年) 屋久島森林生態系保全センター蔵



屋久島森林生態系保全センターに所蔵されている林業古写真

れました。里近くでも薪炭材の入手が困難になり、一部の島民は土地の下げ戻し訴訟を起こしますが、1920年に原告敗訴となります。しかし島民が不満を抱く状況は変わらず、鹿児島大林区署は、翌1921年に屋久島国有林経営の大綱(通称『屋久島憲法』)を発表しました。里近くの国有林から自家用の薪炭材を無償で採取することなどを認めた『屋久島憲法』により、島民と国の衝突は一応の解決となります。

戦時期にかけては木炭やトリモチなどが生産されました。戦前期に製炭事業に従事した知久安彦さん(故人)は、「戦時期は木炭の増産を求められた。木炭は軍事工場に運ばれると聞いた」と語って下さいました。ただし終戦間際には、米軍の空爆を恐れ、国有林野事業は縮小・休止を余儀なくされました。

最終戦を迎え、国有林経営も少しずつ再開し、1956年には九州管内ではじめてチェーンソーが導入され、生産性があがりました。軌道も延伸され、小杉谷から約4km上流に石塚集落も建設されます。最盛期の1960年頃には、小杉谷と石塚集落の人口は合わせて540人に達し、小・中学校、商店・購買部、公衆浴場などが立ち並びました。島内で一番早く電化が進んだのも小杉谷で、近代的な「林業都市」が山中に存在していました。また材を積んだトロノコを、ブレーキを巧みに操作しながら、材を運んだ運材夫(トロノリ)などは、島民の憧れの職業でした。しかし次第に軌道沿いの資源が枯渇し始め、軌道を使った輸送の優位性が失われます。里地の広葉樹の面積皆伐とあわせて、奥地の森林開発も世論の批判の対象となりました。さらに1970〜80年代にかけて、『屋久島を守る会』などの一部島民などによる伐採反対運動が行われ、この運動も一因となり、1980年代以降、島の森林政策は「護る」方向へ転換しました。

ついに最後まで残った小杉谷製品事業所も1970年に閉鎖されました。ただし現在も、ごく一部の区間では、水力発電所の維持管理や登山者のし尿搬出などで、軌道が現役利用されています。

林業集落の閉村から約50年。現在も、石橋や住居跡など当時の暮らしを物語る遺構が多く残っています。屋久島森林生態系保全センターでは、本稿で紹介したような、林業関連の古写真が保管されています。

最後に印象に残るエピソードを紹介し

注1…屋久杉の定義は、近年は1000年以上という表現が一般的ですが、かつては700〜800年を超えるものであっても屋久杉と呼ばれていました。

注2…建設された大半の路線は、「森林鉄道」に分類されますが、島民は「軌道」という言葉を用います。本稿では「軌道」という表現に統一しました。